

コンラッド小説における、言葉と「真実」

辻 建 一

〈要旨〉

ジョウゼフ・コンラッドの作品はしばしば「海洋小説」と「政治小説」に分類されるが、「海洋小説」の代表作の一つに『闇の奥』(1899)が、「政治小説」の代表作の一つに『西欧人の眼の下に』(1911)がある。10年余りの時を挟んで執筆されたこの二つの小説は、物語の舞台や雰囲気はかなり異なるものの、重要な点で通じ合う要素が見られる。特にこれらの小説における「真実」の意味合いに着目し、言葉の欺瞞性に強く意識的であったコンラッドが、それでも物語の作り手として言葉と「真実」との関わりの問題を追究しようとしていた跡を、小説中の重要な文章から読み取っていく。さらに、二つの小説の共通項を探ることによって、『闇の奥』の批評で問題とされることの多い、クルツの今際の際の「地獄だ！地獄だ！」というセリフの意義を再考してみる。

〈キーワード〉

言葉、真実、欺瞞

1. 『闇の奥』と『西欧の眼の下に』の共通項

『闇の奥』の物語は、イギリス人船長マーロウが語っている話を聴いている第一人称無名の「私」が伝えている。また『西欧の眼の下に』の物語は、ロシア人青年ラズーモフの手記が元になっているが、手記そのものではなく、老イギリス人教師が手記を入手しそれを英訳したという体裁になっている。いずれの小説も、全てを知っているナレーターが直接物語を伝えているのではなく、誰かの経験を聴いたり読んだりしたものをナレーターが媒介役となって人に伝えるという形式をとっている。そして内容的にも、イギリス人にとっての他者、異文化との出会いについて語っているという点で共通している。

さらに注目すべき共通点は、大義名分によって美化されがちなヨーロッパ人の行動、活動に対する批判的視点である。『闇の奥』では、ヨーロッパ帝国主義の欺瞞が告発され、『西欧人の眼の下に』ではロシア革命思想の欺瞞が告発されている。まず『闇の奥』では、マーロウが途中で立ち寄った出張所で、そこで働くヨーロッパ人たちの欺瞞性を軽蔑的に描写している箇所がある。

あの出張所をめぐる秘かな陰謀の筋書きでもありそうな気配だったが、もちろん現

実には何も起こらなかった。そのことにしても、他のあらゆることと同じく現実離れしていた。やっていることの全体が、慈善事業でもあるかのような表向きにしろ、彼らが口にすることにしろ、運営管理や仕事の装いにしろ、すべて現実離れ。唯一の現実的な感情といえば、何とかして象牙が集められそうな交易所の一つに任命してもらって、そこで交易の手数料を稼げるようになりたいという欲望だけだった。⁽¹⁾

マーロウは、出張所で表向きに「慈善事業」を謳っていることなども、結局本当にあるのは「欲望」だけであるということを看破しているのだ。

『西欧人の眼の下に』では、例えば次のような文章が見られる。

虚妄な理念と現実遊離の熱き思いのはびこる国、このロシアでは、多くの勇敢な魂が、いつ果てるともしれないむなしい矛盾衝突から、いつも最後には、大地というただひとつの偉大な歴史的現実へと回帰した。彼らは、倦み疲れた不信心者が恩寵に触れて、魂の安らぎを求めて父祖たちの信仰に回帰したのと同じように、愛国的良心の安らぎを求めて専制政治へと回帰した。⁽²⁾

「虚妄な理念と現実遊離の熱き思い」から政治的衝突が繰り返されながら、結局「大地というただひとつの偉大な歴史的現実へと回帰」するということが、ロシア固有の歴史的展開であるような言い方がなされている。ここでは、革命家に根深い不信を抱き、民族的・家系的に「ロシア的精神」への嫌悪を受け継いだポーランド人としてのコンラッド自身の見解がうかがわれると言えるだろう。しかし小説がしばらく進んだ別の個所では、次のような記述も出てくる。

そもそも、あらゆる革命の秘密活動なんて、どれもこれも、愚昧、自己欺瞞、虚偽の上こそ成り立っているものではないだろうか？⁽³⁾

この見解は、「虚妄な理念」や「現実遊離」が必ずしもロシア特有の愚かさというわけではなく、理想を抱いて改革を目指しても結局自己欺瞞の罠へと嵌ってしまうことが普遍的現象であるという洞察を示している。つまりロシアであれアフリカの国であれ、国を良い方向に変えるという人間の活動には何か胡散臭さがつきまとい、そういった活動に口実を与える理念や思想は虚偽にすぎないという点において、共通しているのだ。そして、『闇の奥』の場合は、マーロウがアフリカに行った経験でヨーロッパ文明の虚飾を実感するのに対し、『西欧人の眼の下に』の場合は、老イギリス人教師の語り手が初めからロシア革命思想を胡散臭いものとして眺めている。

2. 『闇の奥』におけるクルツ像のヴァリエーション

『闇の奥』は、マーロウが謎の人物クルツを求めて未体験ゾーンに足を踏み入れていく冒険物語であるが、それまでイギリスで人気を博していた冒険物語とは趣を異にするこの小説は、批評家たちによって多様な解釈が施されてきた。例えばマーロウの異界に分け入っていく船旅を、自己発見のための精神的な旅になぞらえたアルバート・ゲラードのように、深層意識への内面的な旅ととらえる見解はよく見られる。他にも、アーサー王伝説の中にある「聖杯探究譚」に準拠しているという、ジェローム・セイリーの批評などもあり、これらの読みは探求する方のマーロウに主眼を置くものである。

一方、マーロウの探求の対象となるクルツの方に焦点をあてた場合、一つの簡単な要約は、極めて優秀だった一人の西洋人の転落、腐敗、墮落ということになる。しかし小説が進行する過程で、クルツの人物像はいくつもの顔をのぞかせる。マーロウが初めてクルツについて耳にしたのは、最初に立ち寄った出張所の経理主任からである。その情報によるとクルツは、他の出張所全部を全て合わせたより多くの象牙を送ってくる敏腕の奥地出張所の所長ということであり、有能なビジネスマンのイメージである。

その次に、中央出張所で支配人とその叔父との間で交わされる密談をマーロウが耳にして浮かび上がってくるのは、商売だけでなく原住民啓蒙も大きな目的としてアフリカにやってきた理想主義者としてのクルツの姿である。彼らの話によるとクルツは、「出張所は取引の中心であるだけでなく、無知蒙昧なアフリカ人を啓蒙し教化するという役目を持たねばならない」⁽⁴⁾ という考えをもっていた。アフリカに文明の光をもたらしていくという理想に燃えるクルツのイメージが出てくる。

そして奥地に到着して出会うクルツに心酔するロシア人青年に出会うが、彼から聞いた話からは、クルツは象牙強奪のための遠征も行う物欲に溺れた暴君として立ち現われてくる。その残虐な帝国主義的支配者としてのクルツのイメージは、さらにクルツが四つん這いになって歩いている場面が挿入されることによって、先祖返りした強欲の野獣のイメージにまで強められ、バーナード・メイヤーはそこにクルツの「原始的野蛮性への退行」の含みを読み取っている。しかし、病で小屋に伏せているクルツについて語るロシア人青年は、自らの欲望のままに行動する暴君としてのクルツだけではなく、恋愛や思想を語る高邁なクルツの姿についても言及する。

そしてマーロウが実際にクルツが死ぬまでの短い期間接してもったイメージは、真実に触れた探査者というものであった。文明という「あまりにも美しすぎる世界」の「闇の奥」に横たわる人間の真実を誰よりも雄弁に語り、それゆえに「精神的勝利」をおさめた人物というのが、マーロウが抱いたクルツ像である。

さらにアフリカからヨーロッパに帰ってきたマーロウは、また別の人たちからクルツについて聞かされる。まず役人風の男がやってきて、「未開拓地域についてのクルツ氏の知識は — 彼の偉大な能力からしても、また、彼が置かれたひどい状況から考えても、必然

的に広範囲にわたり、しかも独特のものであったに違いない」⁽⁵⁾と語る。次にクルツの従兄弟と自称する男がやってきて、クルツは才能ある音楽家であったと言い、また次にやってきた新聞記者は「クルツの本領は「民衆の側に立つ」政治活動にこそあった」⁽⁶⁾と言う。

このように、敏腕のビジネスマン、アフリカの啓蒙を夢見る理想主義者、残虐な暴君、人間の心の奥に潜む真実を見据えた男、才能ある音楽家、政治活動家など、クルツ像は色々なヴァリエーションを持つことになる。

そして最後に、マーロウが婚約者に会ったときに、クルツの死に際の言葉は婚約者の名前だったと彼女に対して嘘をつくのだが、ピーター・ブルックスは「物語が話される仕方、それが意味するものは、語り手だけでなく、聞き手や語りの状況にもよっている」と述べ、マーロウがクルツの婚約者に対してつく嘘を、クルツの物語のもう一つのヴァージョンと見ている。マーロウによって語られる、最後まで婚約者を想う誠実な恋人としてのクルツ像、あるいは純粋な愛を貫いたロマンティストとしてのクルツ像も、単純に「嘘」として片付けられないということだ。

出来事を語る際、解釈、潤色、韜晦、美化といったような諸要素により、意図的あるいは無意識的なバイアスがかかることは常であるが、コンラッドは語りという営みに否応なく付随してくる欺瞞という問題に大変意識的な作家であった。それゆえ、読者が全面的に信頼できるいわゆる「全知の語り手」による語りではなく、マーロウが友人たちに自分の経験を話すという語りの技法は、言語による客観的な描写の不可能性というコンラッドの問題意識に大変ふさわしいものとなる。つまり語られている物語に、マーロウの主観なり解釈なり歪曲なりが混ざっている可能性が、常に含まれているということだ。極論すれば、マーロウによって船上で語られる話も、婚約者に対して語られる話と同様、どれほど信用していいかわからないということである。

3. 「真実」について

『闇の奥』では「真実」対「欺瞞」というモチーフが、色々な場面で立ち現われてくる。例えば物語の最初の方で、マーロウがコンゴの大河を利用する貿易会社の船長になりたいと思い、伯母を頼って会いに行ったとき、伯母のセリフとそれに対するマーロウの感想を記した箇所では、次のように「真実」という言葉が出てくる。

光の使者のようなもの、幾分安手の十二使徒のようなもの。その頃はそんなふうな戯言がたくさん印刷され、口にされてもいたので、このお偉い伯母もすっかりそうしたたわごとの波にもまれて、足元をさらわれていたかたちだった。彼女は、「無知蒙昧な土民大衆を、その恐るべき生活状態から救い出す」とかおっしゃった。とうとうぼくは居心地のわるい気分になったほどだった。そこでぼくはあえて、あの会社は営利目的で動いているんですよ、とほのめかしてみた。

それに対して彼女は、「まあ、チャーリー、労働人のその値を得るは相応しきなり、ですよ」と明るく答えたものだった。まったく女というものは、奇妙なほど真実に触れることなく生きている。⁽⁷⁾

この文章は、人生において「真実」に直面せざるを得ない男性に比べて、女性の方は「真実」とはほど遠い美しい幻想の中に生きている、という女性差別的な姿勢がうかがえる箇所としてよくとりあげられる。しかしここでむしろ注目したいのは、文章最初の方の「その頃はそんなふうな戯言がたくさん印刷され、口にされてもいた」という部分である。男女を問わず人々は、自らがじかに目撃したり体験したりしたものでない出来事や人物に関しては、書物や噂、そして現代では映像やオンラインの情報など、何らかの媒体を通じてそれらのイメージを持つことになる。マーロウは、伯母の持っている植民地事業の美化されたイメージを「戯言」とか「たわごと」と呼んでいるが、それはマスメディアを通して世間に広まっている信憑性の薄いものであるからだ。ヨーロッパで美化されている植民事業が、本当のところは帝国主義的な略奪搾取にすぎないという認識をすでにアフリカで得てきているからこそ、マーロウはそのような見解を述べるのである。

このマーロウの見解を考えれば、先ほど述べたクルツについての複数存在する物語の中で、他人の話やマスメディアといった媒介なしに語っているという点において、マーロウ自身がじかに出会った経験を通して抱いたクルツ像が、やはり重要視されるべきであろう。他の人たちが口にする才能豊かな優秀な人物としてのクルツ像の方は、ヨーロッパによるアフリカの植民事業と同じように、何となく一般に流通しているイメージということになる。

4. アフリカで見いだされる「真実」について

マーロウは自ら奥地まで行ってクルツに出会ったうえで、「人間の心の奥に潜む真実を見据えた男」というクルツ像を抱くに至るのだが、ここに出てくる「真実」という言葉は、出来事を伝えるという営みにつきまとう「真実」からの逸脱という問題とは、また性質の違う問題を含んでいる。クルツが見据えたという「人間の心の奥に潜む真実」については、クルツが登場する以前に、小説の中盤ですでにマーロウがその性質を説明している。

真実というもの — 時という覆いをはぎとられた裸の真実が確かにあった。馬鹿な奴どもは仰天し震え上がらせるに任せておこう。 — 男たるものは、その真実を知っている。まじろぎもせずそれを直視できる。だがそれには、河岸にいた連中たちと少なくとも同じぐらい赤裸の人間でなければならぬ。その真実に自分の本当の素質をもって — 生まれながらに備わった力で立ち向かわねばならないのだ。主義？そんなものは役に立たぬ。⁽⁸⁾

ここで強調されているのは、文明の虚飾をはぎとった「真実」、理性、知性、観念といったものでごまかしのきかない「真実」である。そして、その「真実」に直面する勇気を得ることは、河岸にいたアフリカ現地人のようにならなければならないと、言っている。

『闇の奥』では、マーロウの船がコンゴ河を遡っていく途中で、アフリカの自然が人間の活動よりも優越しているような描写が繰り返し出てくる。

しかもその外側には、静まり返った未開の大自然が猫の額ほどの開墾された土地を取り囲み、それが悪であれ真理であれ、何か偉大で打ち克ちがたいあるものとして、僕の心に迫ってきた。それはあたかも、この人間どもの気まぐれな侵入が死に絶えてしまうのを辛抱強く待っているかのようであった。⁽⁹⁾

おぼろげなざわめきを通じて、あの物悲しい中庭から聞こえてくる微かな物音を通じて、その偉大さ、それが秘める生命の驚くべき現実性が、ひしひしと強く心の奥に訴えかけてきた。⁽¹⁰⁾

植物たちの巨大な壁、幹、枝、葉、花綱、溢れんばかりに生い茂り絡まりあったその塊が、月の光の中に凝然として、声なき生命の襲来のように押し寄せる植物の大波が、積み上がり、波頭を高くもたげて、今にも入り江に雪崩れかかって、取るに足らぬわれら人間どもを一人残らず、そのしみつたれた存在から洗い流してしまうかと思われた。⁽¹¹⁾

このように、アフリカに見いだされる赤裸の「真実」の偉大さが強調される一方で、虚偽や偽善性に満ちているヨーロッパ人の営みの卑小さが繰り返し言及されていることから、『闇の奥』は帝国主義による植民地事業の「真実」を赤裸々に暴き出すものとして評価されてきた。つまり時代に先んじて、ヨーロッパ列強による帝国主義の植民地政策の非人道的な性質や偽善性を告発した小説であるという評価である。

1975年にナイジェリアの著名な黒人作家チニューア・アチュベが、『闇の奥』にアフリカに対する侮辱的な表現が多く現れていることを指摘し、コンラッドを「とんでもない人種差別主義者」と断罪したあとも、多くの欧米の批評家たちが、コンラッドはアチュベの断定とは全く裏腹にむしろ反人種差別主義者であったと主張して、アチュベの説に反論してきた。このことはコンラッド批評史では周知の事実である。たとえばセドリック・ワッツは次のように書いている。

アチュベは『闇の奥』がアフリカ人を周縁化しているというが、鎖につながれた一団や、茂みで死んでいく搾取された労働者たちの惨状を非常に鮮明に語る時、マーロウは彼らを目に見える存在にしている。他のヨーロッパ人たちが無視することにしたものを、マーロウはつぶさに観察し、冷笑をこめて憤っている。アフリカ人の周縁化は、そ

れこそが批判の対象になっているわけだが、この物語のひとつの主題である。⁽¹²⁾

ワッツは、アフリカ人の周縁化を批判する視点が『闇の奥』に存在すること自体を評価している。それがひいては、ヨーロッパ人の偏見や傲慢さを明るみに出す役割を果たすことにもつながるからだ。さきに引用した伯母のセリフの「無知蒙昧な土民大衆を、その恐るべき生活状態から救い出す」という白人至上主義らしい考えに比べれば、確かにマーロウの現地人に対する視線には同胞としての人間的同情がうかがえる。

とはいえ、マーロウの口から「野蛮な」や「ニグロの」などの差別的な言葉がよく出てくることも事実であり、そのような人種差別的表現の多さから、『闇の奥』には帝国主義のアフリカ搾取への批判的姿勢は認められるが、やはり人種的偏見がにじみ出ているという説が根強く残るのもまた当然である。しかし注意すべきは、マーロウの見解がそのままコンラッド自身の見解というわけではないということだ。

5. 作者コンラッドと登場人物マーロウとの微妙な距離

アチュベの批判に対しコンラッドを擁護した一人であるエロイーズ・ヘイは、コンラッドが反帝国主義であったのに対し語り手のマーロウの帝国主義に対する態度が曖昧だという見解を述べているが、作家コンラッドは確かにマーロウと微妙に距離をとっている。

当然ながら、どんな文学テキストでもそれが書かれた時代背景を考慮する必要がある。コンラッドが『闇の奥』を執筆していた頃は、イギリス国民の多くがまだ帝国主義を立派な事業と見なしていた時代であった。また、『闇の奥』は、『ブラックウッズ・エジンバラ・マガジン』という雑誌に1899年に連載されたのだが、この雑誌は、当時の紳士クラブで一般に備えられていたもので、読者層は大英帝国の植民地政策を支持する保守的男性が多かった。当然コンラッドはそういったイギリスの読者を意識していたことであろう。

またコンラッドは1884年にイギリスに帰化したのであるが、オーエン・ノウルズは、コンラッドが1900年前後の数年間、イギリスでの文化的帰属意識やイギリス人読者層との折り合いをつけるべく苦闘し、そのことが語り手マーロウの出現と結びついている、と指摘している。この指摘を踏まえれば、一見アフリカ蔑視に見えるような表現も、コンラッド自身の差別主義の現れというよりも、むしろ意識的にマーロウに当時のイギリス人の一般的な観念や言葉でアフリカを語らせているというふうにとれるのである。

コンラッドが、イギリス人読者向けの配慮をしているふう読みとれる箇所は、例えばマーロウが訪れたブリュッセルの貿易会社の中で、赤（イギリス）、青、（フランス）、緑（ドイツ）などで色分けされた、ヨーロッパ列強によるアフリカ分割を示す地図を眺める場面に見られる。

目立って広いのは赤だ — いつ見ても気持ちのいいもんだ。そこで本当の仕事が行

われていることを示すものだからね。そのつぎはこれも広大な青、少しばかりの緑、点々と散らばるオレンジ色。そして東海岸には一か所紫色の広がり、上機嫌な進歩の先駆者たちが愉快地ビールでも飲み交わしている場所だ。⁽¹³⁾

マーロウは、コンゴにおける白人支配の悪辣さと非人間性とは違い、大英帝国のアフリカ植民地政策は「本当の仕事が行われている」立派なものだと肯定的に評価している。つまりコンラッドは、マーロウというイギリス人の語り手を介在させることで、植民地統治の残酷な実態を告発しながらも、イギリスの植民地支配のみは賞賛するというスタンスをとっているものであり、マーロウのコメントを必ずしもコンラッド自身の本音ととるわけにはいかない。

次に、河岸で黒人の群れが目玉をぎょろぎょろさせながら乱舞しているありさまを描写した、下の文章を見てみよう。

もっともたちの悪いこと — それは彼らも人間的でないことはないという疑念だった。それは徐々に訪れてきた。彼らほうなり、とびはね、くるりとまわり、そしてすさまじい形相をした。しかし僕らを慄然とさせたのは、彼らもまた僕らと同様、人間だということだった。この凶暴で情熱的な叫びとのあいだにはるかな血縁があるという考えだった。醜悪だ。そう、それは確かに醜悪だった。⁽¹⁴⁾

この文章は一見、アフリカ人を下等なものにとらえる差別的姿勢に溢れているように思われる。しかしその直後に、「だが、君たちにしてほんとうに勇気があるというなら、いやでも認めなければならぬと思うのは、現に君たちの胸の奥にも、あのあからさまな狂騒に共鳴するかすかな痕跡が確かにある。」⁽¹⁵⁾ という文が出てくることに注意しなければならない。この小説において、文明人が隠し持っている獣的な本能という意味合いの「真実」が特に強調されていることを考慮すれば、ここで指摘されているヨーロッパ人の胸の奥にアフリカ人の狂騒に共鳴する痕跡があるという「真実」の方が、むしろより重要な意味を帯びてくるだろう。またこの部分で用いられている “Yes, it was ugly enough; but if you were men enough you would admit . . .” という英語のレトリックも、Yes のあとの内容は一般論として認めつつも、実は語り手の主張は but 以下に置かれているという典型的な形である。それゆえ、ugly (醜悪だ) というセリフはコンラッド自身が本気で抱えている差別的意識の表出というよりも、コンラッドが想定しているイギリス人読者の一般的な感覚を意識しながら書いている言葉ととらえることができる。コンラッドがマーロウの口を借りて強調しようとしているのは、あくまでも文の後半の but 以下の内容、つまりヨーロッパ人とアフリカ人が獣性を共有しているという「真実」の方なのだ。

また同様に、マーロウの語りの中に文明人にとって理解しがたい驚異や恐怖や神秘の対象物としてアフリカやアフリカ人ととらえる視線が頻出することも、人種差別の表れと早

計に解釈するわけにはいかない。確かに、「神秘的な」「表現できない」「謎の」といった修飾語の多用は、アフリカの風景や人間を、西洋人が自分たちの言語を通して表現できないものとしてとらえていることを示しているのだろう。しかし、コンラッドが言葉のもつ欺瞞性にきわめて意識的であったことを思い起こせば、このような用語は、アフリカの原始性や野蛮性をネガティブな意味合いをこめて修飾しているというよりもむしろ、「真実」を歪める機能をもつ言葉の奥にある赤裸々なものをアフリカこそが表していて、その点において虚飾に覆われた文明人よりも勝っている、というふうには肯定的にとらえうるものである。

6. 言葉と真実

『闇の奥』の中でマーロウは、真実を見極めて正確に伝えることの難しさを強調しているが、『西欧人の眼の下に』の老イギリス人教師もまた、「言葉は現実の不倶戴天の敵である」⁽¹⁶⁾ と言っており、言葉の不確かさということに強く意識的である。それはコンラッド自身が持っている、言葉とそれが作る物語の信憑性に対する懐疑精神の反映である。しかしコンラッドは、言葉が紡ぎだす物語と「真実」の関係について、『西欧人の眼の下に』の中で老イギリス人教師の口を借りて注目すべき見解を披露している。

この精神状況は、何らかのキーワードが見つかるまでは、ひとつの物語という制約の中で本質を明らかにすることはおろか、理解することすら容易ではなかろう。そのキーワードとは、物語の全ページを埋め尽くしている言葉の背後に立つことのできる言葉でなくてはならず、真実そのものとはいわないまでも、あらゆる物語の目的たるべき、精神的発見を助けるに足る真実を含むものでなければならない。⁽¹⁷⁾

その直後に老イギリス人教師は、ロシア専制政治とその反逆を背景とするこの物語のキーワードが「シニシズム」という言葉だということ进行を明かす。主人公のラズーモフがテロリストの友人ハルディンを裏切って警察に売りわたしながら、その行為が誤って伝えられてスイスで亡命者たちに歓迎されるというアイロニー。そして彼は背信に耐えられず全てを告白した結果テロリストたちの制裁をうけることになるが、実はラズーモフに制裁を与えた男の一人が、革命家たちにまぎれこんでいた警察側のスパイであったというアイロニー。さらに、俗物性を丸出しにして結局笑うべき存在でしかありえなかった革命家ピョートル・イヴァノヴィッチについて、最後に「靈感を吹き込まれた人です」とコメントされて小説が終わってしまうアイロニー。アイロニー満載の展開を見ると、『西欧人の眼の下に』を埋め尽くす言葉の背後に「シニシズム」があるという観点で読めば、確かに得心がいく。

では『闇の奥』において「物語の全ページを埋め尽くしている言葉の背後に立つこと

できる言葉」とは、何なのだろうか。マーロウがクルツを「精神的勝利」をおさめた男として評価しているが、それはクルツを「精神的発見」をした人物と見なしているからである。そして、その「精神的発見」が「地獄だ！地獄だ！」という言葉に凝縮されていると述べられているので、『西欧人の眼の下に』に出てくる上の文章を念頭に置くと、『闇の奥』において「物語の全ページを埋め尽くしている言葉の背後に立つことのできる言葉」が、クルツの今際の際のセリフ「地獄だ！地獄だ！」であるととらえることが十分可能であろう。

先に述べたように、『闇の奥』と『西欧人の眼の下に』は、理想を追い求める人間の活動の胡散臭さとそういった活動に口実を与える理念や思想に虚偽を嗅ぎ取っている点で、共通するものがある。理想を目指す活動には、美化、正当化などが伴って現実から遊離してくるというコンラッド問題意識は、言語で構築する物語、理念、思想には必ず何らかのバイアスがかかり「真実」から乖離してくるといった問題意識とつながっている。いわゆる革命活動などに大義名分を与えるのが、そういった理念や思想であるからだ。しかし言葉に対するそういう強い不信感にも関わらず、やはりコンラッドは、「精神的発見を助けるに足る真実を含む」キーワードが、小説を埋め尽くす言葉の背後に存在するよう心を砕いていたのである。

注

- (1) Joseph Conrad, *Heart of Darkness* (Boston: Bedford of St. Martin's Press, 1996) 39
- (2) Joseph Conrad, *Under Western Eyes* (Oxford World's Classics, 2002) 25
- (3) *Under Western Eyes*, 61 (上) p140
- (4) *Heart of Darkness*, 48
- (5) *Heart of Darkness*, 89
- (6) *Heart of Darkness*, 89
- (7) *Heart of Darkness*, 27
- (8) *Heart of Darkness*, 52
- (9) *Heart of Darkness*, 38
- (10) *Heart of Darkness*, 41
- (11) *Heart of Darkness*, 45
- (12) J. H. Stape, ed. *The Cambridge Companion to Joseph Conrad* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996) 56
- (13) *Heart of Darkness*, 24
- (14) *Heart of Darkness*, 51
- (15) *Heart of Darkness*, 52
- (16) *Under Western Eyes*, 3
- (17) *Under Western Eyes*, 50

参考文献

- Achebe, Chinua. "An Image of Africa," Keith Carabine (ed.), *Joseph Conrad: Critical Assessments* (East Sussex: Helm Information, 1992), vol. II
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot* (Oxford: Clarendon, 1948)
- Guerard, Albert J. *Conrad, The Novelist* (Cambridge: Harvard University Press, 1979),
- Hay, Eloise Knapp. *Political Novels of Joseph Conrad* (Chicago: University of Chicago Press, 1981);
- Meyer, Bernard C. *Joseph Conrad: A Psychoanalytic Biography* (Princeton: Princeton University Press, 1967)
- Said, Edward W. *The World, the Text, and the Critic* (Cambridge: Harvard University Press, 1983)
- ステイブ, J.H. (編著) 社本雅信 (監訳) コンラッド文学案内 (東京: 研究者、2012)
- 丹治 愛. 神を殺した男 ダーウィン革命と世紀末 (東京: 講談社、1994)
- Thale, Jerome. "Marlow's Quest," Norton Critical Edition, *Heart of Darkness* (New York: W.W. Norton & Company, 1971)